



マンダレー外国語大学日本語学科長、日本語教師と  
(左が筆者、2004年3月)

最初の一年で学んだのは、言葉はあくまでも手段であり、結局は個人が伝えるべきものを持っているのが大切、ということだった。だから、当時のクラスメートとは未だに連絡を取り合っている。英語のハンディがあったからこそ得ることができた生涯の友かもしれない。

## ▶常々生きていくUWCでの経験

UWCでの経験は大学生になっても、社会人になってからも常に生きている。カレッジを卒業して一六年後の二〇〇二年七月、天皇皇后両陛下がポーランドを公式訪問されたが、外務省でポーランド語専門職とし

て勤務する私に任された仕事は、皇后陛下の通訳だった。分刻み、秒刻みの行事が続く中、常に皇后陛下の後ろに控え、日本語からポーランド語へ、あるいは双方方向に通訳する。お食事の席でも、訪問先でも、常に小さなメモとペンを携え、二カ国語で言葉をリレーする。時に緊張と責任感で頭が真っ白になるが、そんな暇もなく会話は続く。通訳は黒衣だ。しかし通訳なしではお話は成立しない。通訳には外国語力ももちろんだが、正しい日本語、そして幅広い知識も加えて要求される。お話のお相手が小さな子どものものであれば、お年寄りのこともある。植物や動物の名前、珍しい食材

の名前が飛び交い、冷や汗をかいた場面は数知れない。ご訪問の五日間、ずっとその連続だった。しかし、そんな五日間も着実に過ぎ、私の人生最大の出来事の一つは無事に幕を閉じた。  
二〇〇四年一月からは、第二の故郷であるポーランドを離れ、在ミャンマー日本大使館で文化担当として留学や日本語普及を担当することになった。

ある日、仕事の一環で日本語弁論大会を行った。ミャンマー人は、「ビルマの竖琴」でも知られるように敬虔な仏教徒で、とても穏やかな人々である。遠慮深く、欧米人のように強く自己主張することは稀である。しかし、日本語弁論大会では、日本に対する憧れや、最近の日本人に関する厳しい意見が飛び交った。普段の生活では控えめな彼らも、日本語では思ったことを表現しやすいのだろうか。二〇年前のカレッジでの自分の姿を思い出しつつ、彼らが思う存分日本語を勉強できるように、そして憧れの日本に留学できるように、考え、工夫しながら日々の仕事を行っている。

十二月二十六日の朝に起きたスマトラ島沖地震はここヤンゴンにも到達し、激しく横揺れした。ミャンマー海岸部も被害を受けたようだが、通信手段の乏しさと厳しい報道規制で、国内での情報入手は難しく、情報入手は主に外国放送が中心である。ミャンマーでも日本や国際機関の支援が始まっているが、まだまだ関連情報はあまりに少ない。  
被災国にも「同じ釜の飯」を囲み、家族同然に暮らしたUWCの同級生たちがいる。彼らの一年の始まりは余りにも厳しいが、私にもできることをして、少しでも良い年になるようお手伝いできればと思っている。

# 自分に伝えたいものがあれば

国際基督教大学高校より一九八四〜八六年、「ester」 Pearson College of the Pacificに留学。八六〜九〇年、国際基督教大学教養学部で社会科学を専攻。九〇年より外務省に勤務。ポランド語専門職員としてポーランドに二度在勤(九一〜九七年、二〇〇〇〜〇四年)。

在ミャンマー日本大使館

二等書記官

大杉ステン・ピエン恵美

Megumi OSUGI-STEPHEN

## ◆最初の一年で学んだこと

日本語、英語、ロシア語、中国語、スペイン語……世界にはたくさん言葉がある。そして、言葉はただの記号ではなく、多種多様なものの考え方でもある。日本語でしか伝えられないこと、逆に日本語ではうまく伝えられないこともある。しかし、自分に伝えたいものがあれば、それを伝達する手段があれば相手に伝わる。そんなことを初めて肌で感じたのは、一九八四年に、UWCピアンカレッジに留学した時だった。そして、今の私がいるのもそのピアンカレッジの経験があるからだ。子どもの頃から漠然と外国への憧れを抱

いていた私は、NHK英語会話を聞き、意味も分からないままにマザーグースの歌を楽しんでいた。ごく自然な選択として帰国子女がほとんどを占める私立高校に入学したが、現実は厳しく、英語力は帰国子女の同級生にとうていかなわず、挫折感と劣等感に悶々とする日々。その劣等感は、ピアンカレッジへの留学が叶った後も続くことになった。とにかく英語が分からない。英語で行われる授業にもついていけない。友達ともなかなか意思の疎通ができない。外国に行けばすぐに話せるようになると思っただ自分が恥ずかしく、情けなかった。

そんな私に救いの手を差し伸べてくれたのはカレッジの英語の先生だった。先生は、

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三八八名の卒業生を輩出している。

私のような非英語圏の学生たちを週一回夜に自宅に招き、英語の歌やゲーム、討論をしながら自然に英語に親しむ手助けをしてくれた。アジア、中東、南米、東欧等さまざまな国籍の「クラスメート」と、一緒に歌い、ゲームを楽しみながら英語を学んだ。時には先生の幼い子どもたちが私たちの「授業」に参加することもあった。クラスでの話題は学生生活、家族、世界情勢等、あらゆるテーマに及んだ。非英語圏出身の私たちは、思ったことを自由に英語で表現することが困難で、先生や他の英語圏の学生たちとの意思疎通はもどかしい。しかし、この英語クラスでは不思議なことに緊張が解けて自然に話ができた。普段、思ったことがうまく表現できない分、一気に言葉がほとばしる。それぞれが知っている単語をつぎはぎにして喋るだけなのだが、先生は一生懸命に耳を傾け、優しく正しい英語に直してくれるのだ。

一年目が終わる頃には、英語圏の同級生たちとも冗談を言えるまでになっていた。